

# ジャズは乾杯

~21~



レストラン「コンボ」で演奏するギターの高柳昌行(中央)、ベースの金井英人(左端)ら

横浜の野毛に昭和八年に開店したジャズ喫茶「ちくさ」がある。もちろん日本で一番古いこのお店は、オーナー吉田さんの頑固一徹ぶりであるが、一面、秋吉敏子、渡辺貞夫をはじめとするまじめなジャズメンたちを愛し、育

「ジャズが若かったころ」といって本を著したジャズ好きの医師内田修さんの世話で、昭和三十七年夏から三回にわたって行われた。高柳昌行、金井英人、富樫雅彦そして日野皓正の顔ぶれによるものだった。それに先立って、新世紀音楽研究所のメンバーは横浜で数回のセッションをやっていたのだが、会場が得られなくなった時、私がある人から名

## 忘れ得ぬ体験 名古屋演奏会

古屋の内田先生を紹介され、演奏の場を求めたのだった。昭和三十七年といえは僕は三十二歳。清水の公立病院を経て郷里岡崎で外科を開業して間もないころだ。何しろ若かったから、二十四時間急患を受け入れ、休みは日曜日の午後だけという忙しさを好きな生のジャズを聴く機会

はほとんどなくなっていた。同じころ「ジャズメッセンジャーズ」など一流ジャズメンの情熱は、技巧を超えて僕

は、久野ちゃんに相談した。「生きたジャズが聴きたいんだ。何とかしてくれないか」。「深夜なら自由に使って下さいよ。おれ、ジョジョ」(高柳の愛称)が大好きなんだ。その年の八月二十六日、東京からやって来たミュージシャンたちは厳しい生活物語を聴かされた。だが時代を先取りした彼のアイデアは日常感覚とかけ離れていた。やがてレストラン「コンボ」は店を閉じ、病に倒れた久野ちゃんは、激しい人生を疾風のように駆け抜けてこの世を去った。

わすかに四十三歳だった。(内田 修)

(内田 修)